偏見の内部構造

海野道郎*1
鏡豊*2

§0·0. 序——研究の視点

「偏見」という言葉を聞いた時に「差別」という言葉しか連想できないとしたなら，その人は自己の発想の貧困を恥じるべきである。しかし実際，「偏見」という言葉は従来あまりにも，「差別」という事実と共に語られることが多かった。そのため今日に至るまで，「偏見」は多くの人々にとって，大きな関心の対象とはならなかった[1]。そしてそれは社会学会においても余り変らない。「偏見」とは社会の恥部に関するもので社会学にとってはマージナルな問題である——偏見に関する社会学的研究が余りにも乏しい日本の現状から推察すると，大多数の社会学者は従来そのように考えていたかの如くである。

しかし少しく考えればわかるように，偏見はわれわれの日常生活を制御するカテゴリー化と密接な関連を持つという意味において，われわれの行為に深く食い込んでいる。だがさらに重要なことは，偏見が従来しばしば論じられている民族的偏見のみならず，いわば思想的偏見とでも名づけるべきものにまで射程を有している，という事実である。ここで思想的偏見とは，自己（ないしは自己の所属する集団）と異なる信念体系を有する個人（ないし集団）に対する偏見である，と暫定的に定義しておこう。従来おそらく言及されたことがないこの事実こそが，偏見の研究を，単に社会の恥部の改善ないし隠蔽，あるいはマイノリティー対策，というような枠を越えて，未来構想の問題にまで関わらせるものとするのである。思想的偏見によってわれわれは，われわれの未来を拓くべき思想・運動の萌芽を，それと気づくことなしに摘み取ってきたのではないだろうか。そしてここに，現代の閉塞状況の一因が潜んでいるのではなかろうか。

無論われわれの社会にとって，差別はすぐれて今日的問題である。そしてまた，われわれを偏見の研究に向かわせる主要な動因の1つが，「差別」という現実が存在することにあるのも事実である。しかし，いわゆる「差別」との関連でしか「偏見」をとらえないならば，この問題の究明を通して得られるであろう未来社会構想へのチャンスを逃してしまうに相違ない。したがって，われわれが今後展開する偏見についての諸論考は，相互に関係する次の2つの視点からなされる。

1）差別をいかにして克服するか。

2）未来を拓く思想・運動の社会的熟成は，いかなる条件の下に達成しうるか。

§0·1. 序——問題の設定

以上のような視点から偏見に関する先行研究を検討した結果，われわれは，現時点でわれわれが取りあげるべき課題として，次の2つを抽出した。

1）現代日本において偏見がどのような広がりをもっているのか，が明らかになっていない。したがって，母数の推定が意味をもつ程度の大規模な母集団を設定し，しかも推定値が信頼できるような統計調査を行なう必要がある。

2）偏見についての理論化が不十分である。したがって，

*1 関西学院大学社会学部専任講師
*2 東京工業大学大学院博士課程

1）明確な差別などはしたこともない多くの善良な人々にとっては，自分が差別の当事者でない以上，差別と分ちがたい関係にある偏見は他人事なのでなる。

a）先行研究の批判的検討を行ないつつ理論モデルを構築すること，および

b）偏見を説明する新しい視点を導入すること，

が必要である。

そこでわれわれは，上記の課題に応えるために，次のような調査を企画した。

1）大きな母集団を設定して統計調査を行なう。具体的には，a）調査スタッフ[2]の居住地に近いこと，b）資金の制約，c）スタッフの1人（安田）の先行研究との連結可能性，等を考慮して，東京都区内在住の20才以上70才未満の成年男女とする。

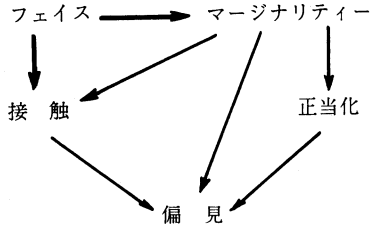
2）理論的側面については，

a）偏見に対して重要な影響を及ぼすことが指摘されている「接触」をとりあげる。また，

b）偏見を保持するメカニズムとして「正当化」という概念を導入し，さらに「正当化」を支える基盤として「マージナリティー」を考える。

その結果，われわれの調査は，大略，図0・1のような理論図式を基礎とすることになった。

図0・1　調査の理論図式



また，偏見の対象の選択は次のように考えた。まず，われわれが基盤としている知見が民族関係についての研究から得られたものであることを考慮すれば，本調査においてもそのような対象を選択する必要がある。そこで民族集団として，「日本に住む朝鮮系の人(C)」を選んだ。しかし日本において偏見視されている対象は民族集団ばかりではない。また，過去の研究で，異なる民族集団に対する偏見の類似・相違を研究したものはあっても，民族集団以外のものとの比較検討を行なったものはない。そこで，もう1つの対象として「精神病院に入院したことのある人(S)」を選んだ。これは将来行なう思想的偏見に関する研究のための布石でもある。

以下に述べる分析は，このような枠組の下に行なった調査[3]を基礎にしている。

分析においては，初めに，調査票に組み込んだ変数の操作的構造を検討した。ここで操作的構造というのは，サンプルの反応によって定まる構造のことである。このような構造を探る方法にはいろいろあるが，本研究では階層的クラスター分析を用いた[4]。調査票に組み込んだ項目の大部分に関する相関表を作成しそれに対してこの分析を適用したところ，Sないし，Cに対する種々の態度(偏見)項目が1つの大きなクラスターを形成することが見出された。しかもこれらの諸項目は，図0・1に示したように，以後に続くべき規定因分析，因果分析における中心的な被説明変数である。したがって，その性質を十分解明しておくことは非常に重要である。そこで本稿では，このクラスターの要素である態度項目に対して，「Sに対する態度とCに対する態度との間にはどのような関係が存在するのか」という点に注意を向けながら分析する。

§1　偏見項目の相互関係

偏見を構成する項目が1つのクラスターに属することが見出されたが，それらが相互にどのような類縁関係にあるかを，階層的クラスター分析を用いてさらに検討した。対象としたのは，次節で詳述する20項目である。

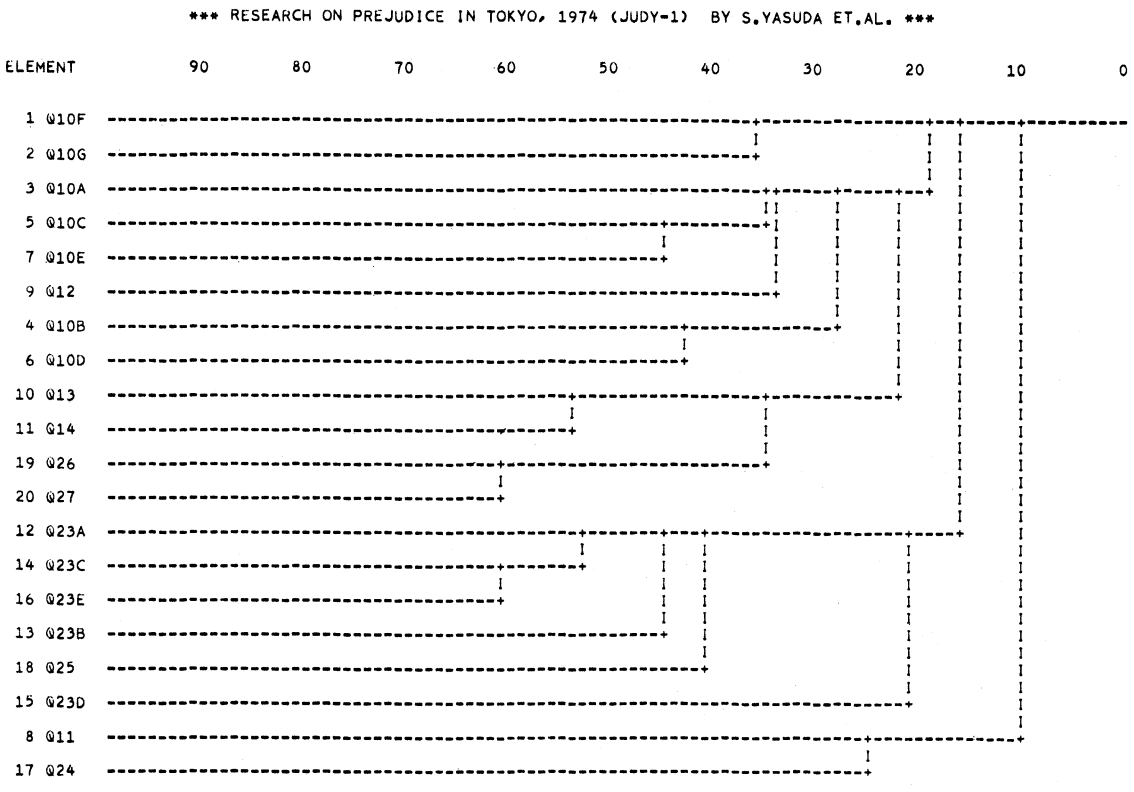
得られた結果は，クラスタリング規準（最近隣，最遠隣，群間平均距離）の相違によって細部においては変化するが，全体的構造は共通性を保っている。図1・1には群間平均距離を用いた場合のデンドログラムを示した。この図，および他の2

2）安田三郎，鈴木貞雄（共に当時東京大学）と筆者ら2名。

3）1974年10月実施。訪問面接調査。計画サンプル700。有効回収サンプル528（75.4%），補助サンプルを加えると651。以下の分析は補助サンプルを加えたものに対して行なっている。なおこの調査全体については，（安田ら，1976）を参照。

4）項目間の類似度は，カテゴリー間に等距離を仮定して，ピアソンの積率相関係数によって定義した。また，クラスタリングの規準には，最近隣，最遠隣，群間平均距離の3つを採用した。詳しくは，（安田・海野，1977）を参照。

図1・1　偏見項目のクラスター分析



規準の場合のデンドログラムを比較検討すると，次のような事実が得られる[5]。

〔事実 1・1〕友人づきあいに関する態度項目（Q11，Q24）は，他の項目と比べて異質である。(調査の全体の項目についてクラスター分析をほどこした場合，この項目は「つきあい」に関する一般的態度項目とクラスターを形成する。)

〔事実 1・2〕上記の2項目を除くと，態度項目は次の3つのサブクラスターで構成されている。

C_1：Sに対する認知的成分(Q10A～Q10E)，および隣人づきあいに対する態度（Q12）

C_2：Cに対する認知的成分(Q23A～Q23E)，および隣人づきあいに対する態度（Q25）

C_3：SないしCに対する，（自分あるいは娘との）結婚に関する態度（Q13，Q14，Q26，Q27）

すなわち，同じタイプの項目同士の結合よりも，同じ対象に対する項目同士の結合の方が強い。この傾向は行動的成分よりも認知的成分の場合に著しい。

〔事実 1・3〕上記の2群 C_1 と C_2 を比較すると，その中核的部分{Q10C，Q10E，Q10A}と{Q23C，Q23E，Q23A}は共通である。

〔事実 1・4〕Sの場合にはQ10BとQ10Dが核を形成して中核と合併する。これに対してCの場合には，Q23BとQ23Dが相互に結びつくことはせず，中核に順次吸収される。ただしQ23Dの吸収は非常に低い水準で生じる。

〔事実 1・5〕結合の水準は一般にCの方が高い。

以上の諸事実から次のような推論が可能である。

〔推論 1・1〕（事実1・2より）対象のいかんによらない共通の側面よりも，対象が何であるかが問題とされている。（なぜなら，もしサンプルにとって対象が同じように「いやな」存在ならば，2つの対象に関する対応した項目——たとえばQ10AとQ23A——が先ず合併し，しかる後に他の項目と合併するはずだからである。）また，認知的

5）ここでの議論はSとCとの対比に主眼があるので，Q10F，Q10Gはとりあえず無視する。

成分と行動的成分の差異に着目しその傾向を極端に表現すると，「行動的成分においては，Sに対して非好意的な人はCに対しても同様な傾向をもつ．これに対して認知的成分においては，Sに対して非好意的な人とCに対して非好意的な人は別である」ということになる。

〔推論 1·2〕（事実1·3より）Sに対する偏見とCに対する偏見は，その中核的部分においては類似している。

〔推論 1·3〕（事実1·4より）Sの場合には社会的無能力が強く意識されている。

〔推論 1.4〕（事実1·5より）Cの方が，Cであるということによって反応される（すなわち各側面が未分化である）のに対して，Sの方は各側面ごとに評価される傾向がある。このことは，Sが「近いけれども好ましくない人」であるのに対して，Cが「遠い人」であることを示唆している．

表2·1　偏見項目の単純集計（認知的成分）（%，N＝651）

		A 気味が悪い	B 社会の役に立たない	C 何をするかわからない	D 社会生活を営めない	E 面倒がおこりやすい
S精神・Q10	1	29.0	7.7	26.9	15.5	30.1
	2	7.7	12.1	17.7	14.9	15.7
	3	57.6	72.8	45.6	62.1	40.6
	D. K. その他	5.7	7.3	9.9	7.6	13.7
C朝鮮系・Q23	1	7.1	4.1	5.5	8.4	8.6
	2	6.0	7.4	10.6	6.1	9.1
	3	83.4	78.8	75.1	77.1	73.4
	D. K. その他	3.6	9.7	8.8	8.4	9.0

（注）1：そう思う，2：どちらともいえない，3：そんなことはない。

表2·2　偏見項目の単純集計（行動的成分）（%，N＝651）

		Q11,24 友人	Q12,25 隣人	Q13,26 結婚(自分)	Q14,27 結婚(娘)
S精神	1	58.5	47.9	20.4	17.7
	2	10.1	22.4	16.7	20.3
	3	27.3	23.3	49.8	52.7
	D. K. その他	4.1	6.3	13.1	9.4
C朝鮮系	1	88.5	73.1	43.8	39.2
	2	4.6	15.8	18.3	21.7
	3	4.1	7.5	26.6	29.8
	D. K. その他	2.8	3.5	11.4	9.4

（注）1：受容，2：どちらともいえない，3：拒否。ただし，友人の場合は，1と3が調査票とは逆になっている。

§2. 偏見の構成項目——認知的成分および行動的成分の分布特性——

前節の検討によって，いくつかの推論を得た。それらの点を確証するため，初めに，偏見を測定するためにわれわれが用いた各項目の分布特性について述べよう。ここでは，認知的成分および行動的成分についてのみ検討する[6]（表2·1，表2·2）。分布を検討した結果得られた主な知見は次の通りである。

〔事実 2·1〕すべての項目において，好意的反応の比率はSよりもCが大きく，非好意的反応はCよりもSが大きい。非好意的反応比率のSとCに対する差の大きさによって項目を分類すると表2·3のようになる。

表2·3　SとCに対する非好意的反応比率の差の大きさによる項目の分類

SとCとの差	項目
10%未満	B，D
10%以上20%未満	(12，25)
20%以上	A，C，E，(11，24)，(13，26)，(14，27)

〔事実 2·2〕Cに関しては，すべての認知的成分（Q23A～Q23E）および友人関係（Q24），隣人関係（Q25）の分布形が類似している。

〔事実 2·3〕Sに関しては，Q10AおよびQ10C，Q10E，Q11が類似の分

6）表には載せてないが，この他にSに関する認知的成分を測るものとして，Q10F（精神病院にいる患者はあばれたり興奮しているものが多い），Q10G（精神病院は隔離すべき）がある。それぞれの回答比率は次の通りである。Q10F（1：24.1%，2：16.6%，3：33.9%，D.K.他：25.4%），Q10G（1：51.0%，2：12.6%，3：25.5%，D.K.他11.0%）。

布形をしている。「社会の役に立たない」(Q10B)，「社会生活を営めない」（Q10E）では非好意的反応の比率が小さく，Cと似た分布形になる。

〔事実 2·4〕結婚に関しては，自分の場合も娘の場合も，非好意的反応が増加する。特にSにおいては，非好意的反応の方が多くなる。

上記〔事実 2·3〕を若干検討してみよう。「Q10A，Q10C，Q10E」は，主にSとの個人的関係を問題にしているのに対して，「Q10B，Q10D」は，Sの社会的能力に関するものである，と考えられる。もしこの仮定が正しいならば，Q10B，Q10Dに対する反応は，Sの能力に対するサンプルの認知と関連するはずである。そこで，「Sは頭がよいか，悪いか」という項目（Sに対するステレタイプ項目の1つ，Q15E）とQ10B，Q10Dとの関係を検討した（クロス表は略)。

〔事実 2·5〕「Sは頭がよい」と回答した人ほど，Q10BでSに好意的である。また「非常に頭がよい」と回答した人を除けば，Q15EとQ10Dとの間にも同様の傾向がある。

ところで，「社会の役に立つか否か」ということは，本人の頭の良さばかりでなく，その社会で承認されたある一定の形式の努力ということとも関連しているであろう。そこで，「Sは努力家か怠け者か」という項目（Q15D）とQ10B，Q10Dとの関係を検討し，次の知見を得た。

〔事実 2·6〕「Sは努力家」と回答した人ほど，Q10B，Q10DでSに好意的である。（ただし，ここでも，Q10Dとの関係では「Sは非常に努力家」と回答した人はこの傾向からはずれる。)

以上の事実から次の推論をすることができる。

〔推論 2·1〕（事実2·1，事実2·3より）Cは，比較的遠い存在であるために，「Cである」ということによって判断される。しかし，結婚のように直接関係のある問題になると，内容にまで立ちいった判断がなされる。

〔推論 2·2〕（事実2·1，事実2·3より）Sの場合には，近い存在であるために，内容に立ちいった判断がなされる。しかしSは好ましくない人でもあるので，非好意的反応が多い。

〔推論 2·3〕（事実2·5，事実2·6より）Sに対する非好意は，個人的関係における恐怖と，社会的能力に関する蔑視とから構成されている。社会的能力に関する蔑視は，Sに対して抱いているステレオタイプによって影響をうける。すなわち，Sを「頭がいい」あるいは「努力家だ」と思っている人ほど，Sの社会的能力を否定しない。

表3·1　偏見項目の因子負荷行列

変数＼因子	FC1	FC2	FC3	FC4	FC5
Q 10A	0.4774	—0.3329	—0.1592	0.1542	—0.3636
Q 10B	0.5136	—0.1532	—0.2936	0.1860	0.4647
Q 10C	0.5811	—0.3134	—0.2899	0.0691	—0.0751
Q 10D	0.5147	—0.1536	—0.3651	0.2569	0.4011
Q 10E	0.5404	—0.3669	—0.3142	0.0464	—0.0757
Q 10F	0.4714	—0.0953	—0.2572	—0.5835	0.1236
Q 10G	0.3526	—0.2603	—0.1352	—0.6540	0.0274
Q 12	0.5258	—0.2827	0.0267	0.0586	—0.5017
Q 13	0.5281	—0.3576	0.3873	0.0299	0.0507
Q 14	0.4831	—0.4510	0.3417	0.1676	—0.0961
Q 23A	0.5327	0.5317	0.0793	—0.0019	—0.0556
Q 23B	0.5780	0.4143	—0.1999	—0.0499	—0.1245
Q 23C	0.6334	0.5748	—0.0210	—0.0311	—0.0588
Q 23D	0.2862	0.2843	—0.2778	0.4029	0.0002
Q 23E	0.6039	0.4569	0.0243	—0.0645	—0.0456
Q 25	0.5790	0.3294	0.1331	—0.0319	—0.1024
Q 26	0.5703	—0.0434	0.5041	—0.0383	0.3005
Q 27	0.5688	—0.0367	0.5715	0.0441	0.1455

図3・1　因子面（第1因子—第2因子）

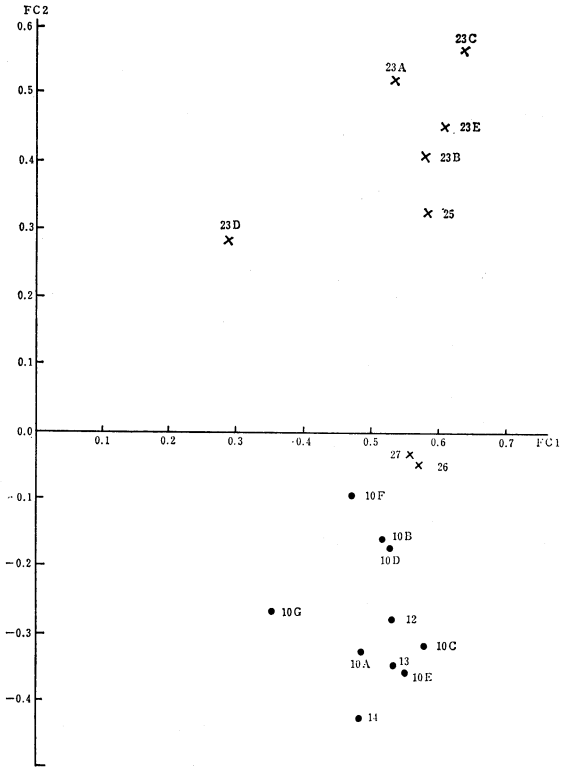
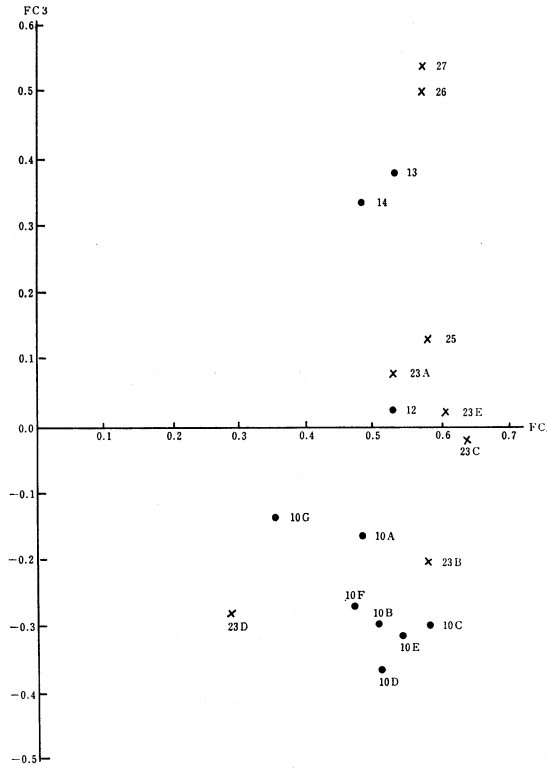


図3・2　因子面（第1因子—第3因子）



§3.　偏見の因子構造

偏見の内部構造をさらに探るために因子分析を行なった。クラスター分析の対象とした20変数のうちQ11とQ24は他のものと異質なのでひとまず略し，残りの18変数に対して主因子法による分析を試みた。得られた因子負荷行列が表3・1に示されている。また図3・1には第1因子と第2因子によって構成される因子面を，図3・2には第1因子と第3因子によって構成される因子面を示した。これらを検討した結果，各因子の意味づけを次のように行なった。

第1因子：対象には関係なく存在する偏見的態度

第2因子：対象による差異

第3因子：対象との関係の直接性

第4，第5因子については，明確な意味づけが出来なかった。

なお，この因子負荷行列にバリマックス回転を行ったが，付加すべき知見は得られなかった。

§4.　偏見の次元構造

因子分析によってわれわれは，1）対象に関係なく存在する偏見的態度を抽出すると共に，2）対象による差異が存在する，という知見を得た。では，それぞれの対象に対する偏見は，どのような構造的差異を有しているのだろうか。すなわち，それらは

1.　何次元空間によって最も効率よく（次元数は出来るだけ小さい方が望ましい，という基準のもとで再現性係数を大きくする）説明できるか。また，その場合，

2.　各反応パターンはどのように位置づけられるか。

これら2点を検討するために，S，Cの各々について，認知的成分，行動的成分のそれぞれに対してPOSA (Partial Order Scalogram Analysis) を適用した[7]。S，Cの行動的成分に関する図が，それぞれ図4・1，図4・2に示されている．これらの図を検討した結果，次のような知見を得た。

7）POSA に関しては，（林，1971），（田中，1973）などを参照。

図4・1 POSA DIAGRAM（対S）

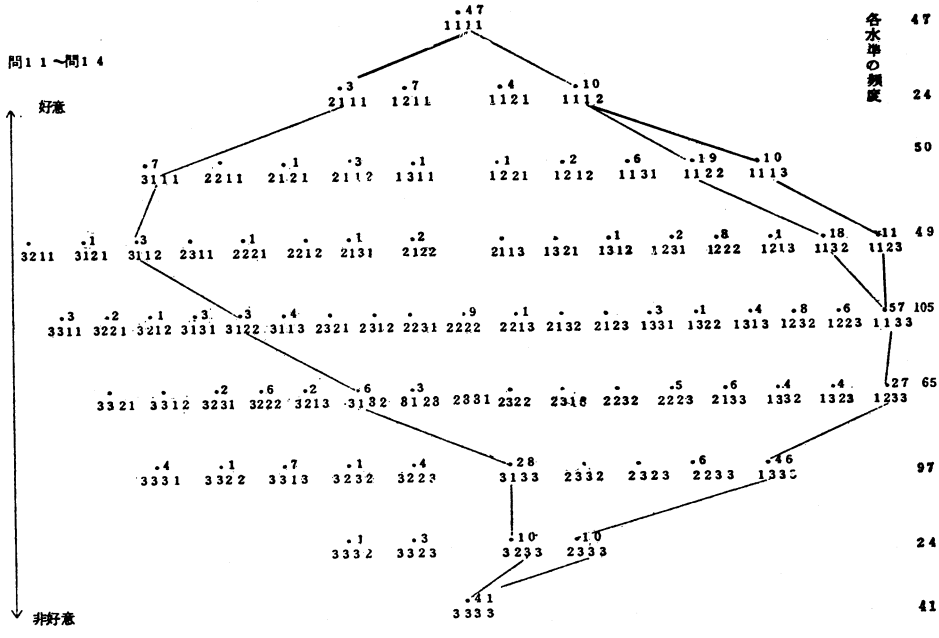


図4・2 POSA DIAGRAM（対C）

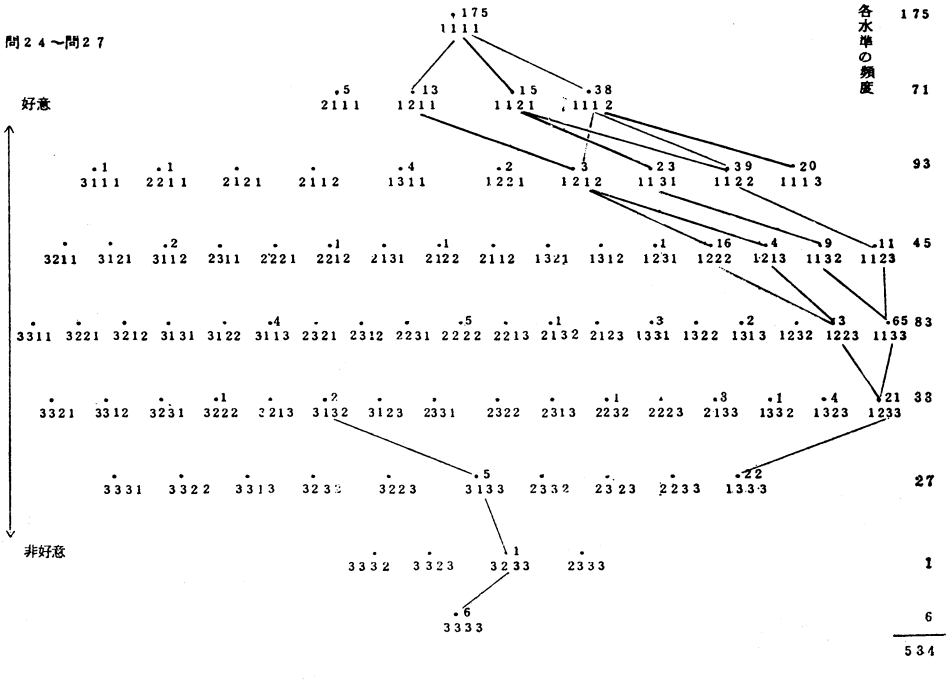


図4・3　POSA DIAGRAM の2次元空間への配置

（対S）

Q11		9	8	7	6	5	4	3
1	1	1333 (46)	1233 (27)	1133 (57)	1132 (18)	1122 (19)	1112 (10)	1111 (47)
2	2	2333 (10)	2233 (6)	2133 (6)	2132 (0)	2122 (2)	2112 (3)	2111 (3)
3	3	3333 (41)	3233 (10)	3133 (28)	3132 (6)	3122 (3)	3112 (3)	3111 (7)
	Q14	3	3	3	2	2	2	1
	Q13	3	3	3	3	2	1	1
	Q12	3	2	1	1	1	1	1

（　）内は頻度，再現性係数：$\frac{352}{502}=0.70$

図4・4　POSA DIAGRAM の2次元空間への配置

（対C）

Q26		9	8	7	6	5	4	3
1	1	3313 (0)	2313 (0)	1313 (2)	1213 (4)	1113 (20)	1112 (38)	1111 (175)
2	2	3323 (0)	2323 (0)	1323 (4)	1223 (3)	1123 (11)	1122 (39)	1121 (15)
3	3	3333 (6)	2333 (0)	1333 (22)	1233 (21)	1133 (65)	1132 (9)	1131 (23)
	Q27	3	3	3	3	3	2	1
	Q25	3	3	3	2	1	1	1
	Q24	3	2	1	1	1	1	1

（　）内は頻度，再現性係数：$\frac{457}{534}=0.86$

〔事実 4・1〕Sの場合もCの場合も，1次元尺度化可能な系列が複数存在する。それゆえ，項目群全体としては1次元でない。

そこで次に，2次元空間への配置を試みた。S，Cそれぞれの場合に，結果は図4・3，図4・4のようになった。再現性係数は図中に示した通りである。この図を検討すると，次のような知見が得られる。

〔事実 4・2〕Sの場合，友人関係（Q11）よりなる軸と，他の3項目よりなる軸とで構成される2次元空間に配置した場合に，再現性係数が最も高くなる。

〔事実 4・3〕Cの場合，自分の結婚（Q26）より成る軸と，他の3項目よりなる軸とで構成される2次元空間に配置した場合に，再現性係数が最も高くなる。

〔事実 4・4〕2次元空間に配置した場合の再現性係数は，Sの場合（0.70）よりもCの場合(0.86)の方が高い。

事実4・1は，いわば自然な結果であろう。事実4・2と事実4・3の差異が生じた理由について，われわれは未だ適切な解釈を持ち合わせていない。事実4・4からは，再び，CがCとしてとらえられがちであるのに対して，Sに対する態度構造は一層複雑である，という推論が可能である。

§5. 結　論

以上の分析から得られる暫定的結論は，（細部の繰り返しを避けると）次の通りである。

1）対象のいかんによらない「偏見的態度」が存在する。

2）しかし，その偏見的態度の強度は，対象のいかんによらない共通な側面によって変る部分よりも，対象の相違によって変る部分が大きい。

3）しかも，対象が異なると偏見のメカニズムも異なる。すなわち，Cは，Cであるということ自体によって反応されるのに対して，Sは，Sのどのような側面であるかによって反応される。ことに，Sに対する偏見には能力主義の影響がみられる。

したがって，偏見は，対象の相違によって，その強度を変えるばかりではなく，そのメカニズムをも変貌させるようである。偏見に関する従来の研究は，その対象をほとんど民族集団に限っていたために，このことに気づかなかった。しかし，このような示唆が得られた以上，われわれに課せられた大きな課題は，「対象の相違によって，偏見のメカニズムがどのように変化するか」を明らかにすることであろう。

しかしながらそれは，偏見の対象となっているものをやみくもに分析することではない。われわれが初めに行なうべきことは，偏見の対象となっているものの構造を解明することであろう。そのためには，可視性，移行可能性，権力関係の逆転可能性など，さまざまな概念を導入することが考えられるが，この問題に関しては，稿を改めて報告することにしたい。

引　用　文　献

田中良久　1973，『心理学研究法16　尺度構成』東大出版会。

林知己夫　1971，「MSA—POSAと数量化」，『研究紀要（昭和46年1月）』，世論科学協会。

安田三郎・海野道郎・鏡豊・鈴木貞雄　1976，「偏見の研究(1)——Judy-1調査中間報告書——」(謄写刷)。

安田三郎・海野道郎　1977，『社会統計学（改訂2版）』丸善。

付　録（質問抄）

以下に示すのは，「日本に住む朝鮮系の人」に関する質問である。本文中で述べたように，「精神病院に入院したことのある人」に関しても並行的な問が設定してある。なお，問23のイ，ロ，……は，本文中のA，B，……に対応する。

問23　つぎに読み上げる文章に，『そう思う』，『そんなことはない』，のどちらかでお答え下さい。

	そう思う	どちらとも言えない	そんなことはない	わからない	答えたくない
イ　日本に住む朝鮮系の人は，気味が悪い。	1	2	3	8	9
ロ　日本に住む朝鮮系の人は，社会の役に立たない。	1	2	3	8	9
ハ　日本に住む朝鮮系の人は，ほおっておくと何をするかわからない。	1	2	3	8	9
ニ　日本に住む朝鮮系の人は，一般の人と同じような社会生活を営むことができない。	1	2	3	8	9
ホ　日本に住む朝鮮系の人が自分のまわりにいると，面倒なことがおこりやすい。	1	2	3	8	9
	そう思う	どちらとも言えない	そんなことはない	わからない	答えたくない

問24　〔リストQ〕今まで親しくつきあっていた友人が，日本に住む朝鮮系の人だということがわかったとします。そんな時，もしあなただったら，次のどちらが適当だと思いますか？

親しい友人の中に，日本に住む朝鮮系の人がいるということを，

1. できるだけ隠しておきたい。
2. どちらとも言えない。
3. 別に隠す必要はない。

問25　〔リストI〕もしお隣に，日本に住む朝鮮系の人が越してきたいと言ったら，どうしますか。

1. 隣に越してきたら，近所づきあいをしてもよい。
2. どちらとも言えない。
3. 隣に越してきてもらいたくない。

問26　〔リストJ〕今まで結婚を考えてつきあっていた人が，日本に住む朝鮮系の人だということがわ

かったとします。そんな時，もしあなただったら，どうしますか？

1. これからも結婚相手としてつきあう。
2. どちらとも言えない。
3. 結婚をあきらめる。

問27　今のと，少し似ていますが，もしもあなたに年頃の娘さんがいるとして，その娘さんが結婚の相手として選んだのが、日本に住む朝鮮系の人だったとします。相手の男性は申し分のない人ですが，二人の結婚に賛成しますか，それとも反対しますか？

1. 賛成。
2. どちらとも言えない。
3. 反対。